

## ワシントン・アーヴィング文学の研究動向

——アメリカ文学批評の変遷を背景として——

齊 藤 昇

アメリカ・ロマン派文学の時代を彩る作家たち、たとえばホーソーン、メルヴィル、ポーなどに比較すれば、ワシントン・アーヴィングの場合、残念ながら、その研究の量的盛況は望むべくもない。その主たる原因はアーヴィングの文学活動がスケッチ風の短編小説をはじめ、歴史物語、伝説、紀行の類など、あまりにも多岐にわたるために個々の作品に対する評釈は可能でも、それを全体的に関連づけて把握する批評風土に適さなかったことにある。このような事情は、わが国だけに限られた現象ではなく、欧米における傾向も同様である。

とは言うものの一九六〇年代以後、均質化された一元論的な考察が衰退を示す一方で、様々なアメリカ文学批評研究の潮流を背景として、とりわけアメリカ・ルネサンス期の作家群との文学的比較研究や周辺考察に入念な注意を払う必要があるとの活発な議論が繰りひろげられたり、保守派の主張する文学の普遍性や美的価値観から離れた観念の優位性を説くといった、いわば正典<sup>カノン</sup>の広範囲にわたる見直しがもたらされた。そのような状況の中で、アーヴィング文学の再評価が必須であるという認識が生まれてきたことは注目すべきことであろう。

これまでのアーヴィング文学の批評研究は先述のように生産的ではないにしても、その多面的な方法論と広汎な文学的境界を特徴づけて、実証的考察が加えられた伝記学から文芸思潮史的な研究や作品解釈学に至るまで様々な形態で行なわれ、その成果は有意義に結実している。

では、アメリカ文学批評史を背景にしたアーヴィング文学の批評研究の変遷を概観し、その静かな動向に触れてみたい。

まだアメリカにおける文学批評の混淆が認められ、新しい社会秩序への過度期にあった一八〇〇年代に、アーヴィング文学への萌芽的関心を誘い、伝記学的研究の先駆的業績となったピエール・アーヴィングの『ワシントン・アーヴィングの生涯と書簡集』（全四巻、一八六二—一八六四）を第一に挙げなければならない。これはアーヴィングの甥にあたるピエールが丹念に書簡、未公開の草稿等に言及しながら、しかもアーヴィングの生き方への共感を支えにして執筆した伝記書である。この研究書には一方において幾分、主情的に流され、その語り口には

客観性を欠くという批判があるものの、アーヴィング文学の正典の編成とその礎石を築いたという意味で、依然としてアーヴィング評伝の先駆的な意義が損なわれるような様相は窺えない。次いでダニエル・ワイズの伝記研究書『ワシントン・アーヴィング』（一八八三）が刊行されて、文学者としての足跡を吟味し、過去の業績を検証することで伝統的なアーヴィング像の命脈が保たれた。

以後は新しい伝記的事実や資料の発掘、分析が行なわれ、稼働される諸機能や条件を考慮に入れるようになった。そしてT・A・リチャード、ジョージ・リプリー、J・G・ロックハート、ウィリアム・ハズリットといった批評家たちの断片的な作品批評論が一九二〇年代に至るまで各種の専門誌に発表されたりしたが、やはりこの時期においても次第に周縁化され、熟成した評伝領域の研究家、チャールズ・ウェイナーの『ワシントン・アーヴィング』が特筆すべき業績として残されている。

一九三五年に欧米の学界で注目を浴び、高い評価を受けた記念碑的な労作があらわれた。スタンリー・ウィリ

アムズの千頁に及ぶ大著『ワシントン・アーヴィング伝』(全三巻)がそれである。ウィリアムズは公開されたアーヴィングの書簡、日記、ジャーナルの類を周到に渉猟した上で、さらに客観的資料の徹底的な検証に立って、着実にアーヴィングの実像に迫った。アーヴィングの立体的な全体像を克明に刻むことで一途にその文学的価値を擁護したこの研究書の学問的貢献は多大であると共に當時における伝記学の高揚期としての特徴を成していると言える。

さて、さらに三〇年代のアーヴィングの作品批評論としては豊富な論証的資料を用意して発表されたヘンリー・ポッチマンの『スケッチ・ブック』におけるアーヴィングのドイツ的資材」に注目したい。これはアーヴィングの代表作である「リップ・ヴァン・ウィンクル」(この作品はオトマーの『民話集』に収められたペーター・クラウスの話に依拠しているというのが定説である)と「スリーピー・ホローの伝説」(この作品もG・A・ビュルガーの『幽鬼の首領』とJ・K・ムゼーウスが集成し

た『ドイツ民間童話』中に含まれているポーランドとチェコスロバキアの国境に聳えるスーデタン山脈の精を扱った「デューベザール伝説」に拠る)はドイツ民話にその資材を得たとする精密な原文解明批評であり、極めて実証性の度合いの濃いものとなっている。この時期を契機に地道な原文考察と伝記学の構築にはじまったアメリカでのアーヴィング文学研究は一時代を席捲した形式主義的研究の狭隘さや、単なる儀式的なアプローチを採る傾向から離れて多様な視点を模索することになる。たとえば、「時間からの脱落」を発表したフィリップ・ヤングや「アーヴィングのワシントン」のジョージ・ヘルマンらはその重要な布陣であった。

四〇年代以降になると、緻密な伝記学的または社会的批評の風潮を背景にして、より深く掘り下げた研究が比重を占めるようになる。その代表的なものは、ヴァン・W・ブルックスの『ワシントン・アーヴィングの世界』(一九四四)、エドワード・ワーゲンニヒトの『ワシントン・アーヴィングの評伝』(一九六二)、ウィリアム・ヘッ

ジズの『ワシントン・アーヴィング——そのアメリカ的研究』（一九六五）そしてメアリー・W・ボウドン『ワシントン・アーヴィング』（一九八一）である。書誌

学研究に礎を置いたこれらの実証論究を経て、近年次第に活況を呈しはじめているサイコ・バイオグラフィカルな視点から考究したジョフリー・ルービンドルスキーの『旧世界を彷徨して——ワシントン・アーヴィングの心

理学的巡礼』（一九八八）は、新鮮で興味深く、また示唆的でもある。ユング派の精神分析学に依拠したこの研究書には大胆な心理学的洞察が随所に見られ、従来の伝統的で通俗的なアーヴィング像とは若干、趣を異にして、そこには特にヨーロッパ滞在期の果敢で活動的な文学者の姿が躍動している。だが個々の資料の解釈においていささか偏向するきらいもあって、必ずしも首肯しがたい叙述も散見し、この種の研究の困難さを窺わせる。

その他にも、アメリカの神話批評の興隆に関り、斯界の権威でもあるダニエル・ホフマン、レスリー・フィードラー、カール・V・ドレン、コンスタンス・ルークら

が登場して、アーヴィング文学の再評価を試み、民俗学的研究を有効に生かした先鋭な批評活動を展開したのである。

以上概観してきたように、アメリカ本国におけるアーヴィング文学の批評史は、それぞれの時代を背景に固有の学派的批評的姿勢や研究方法論の影響を受けつつ現況に至った。

最近十年間はアーヴィング文学の研究領域の主流を占めてきた従来の伝記学的考察も単なる憶測による荒唐無稽なアプローチが避けられ、より学問的厳密さが加わることによって深層のかつ多角的なアーヴィング像を巧みに描出できるようになった。やがて、このようなアーヴィングへの真摯な探求が際立った系譜学的文化批評へと導き、アーヴィング文学の新しい結晶面を光らせることになるだろう。